

森本あんり『アメリカ・キリスト教史——理念によって建てられた国の軌跡』（新教出版社、2006年、1,785円）

現在のアメリカにおいて、自分の宗教に関して質問されて「プロテスタント」と答える者が55%、「カトリック」と答える者が28%で、また70%の人がどこかの宗教団体に所属



し、43%の人が先週の礼拝に出席したと答えるといい、またこうした数字はこの半世紀間ほとんど変化がないものだという(p.161)。本書はこうした統計にも見ることができるように、建国から現在に至るまで大きな力を持ち続けてきているアメリカのキリスト教の歴史を概説するものである。

構成としては、章毎に編年的にまとめられており、各章の冒頭には関連年表が掲げられて理解を助けている。以下やや後半部に重点を置きながら章を追って内容を紹介していく。

コロンブスが1492年にアメリカ大陸を“発見”したことについては広く知られているが、その航海はスペイン女王の援助とローマ教皇の認可を受けたものであった。第1章「「アメリカ」の始まり」から第2章「ニューイングランドの建設」は、こうしてカトリックによって始められたアメリカ・キリスト教の歴史が、1620年にメイフラワー号がプリマスに到着してからどのようにプロテスタントによって展開されていくのかについて概観している。

続いて第3章「ピューリタンの信仰と生活」はニューイングランドで英国本国とは異なる独自の教義綱領が制定されたことに触れ、またそうした教会が社会の中にどのように位置付けられるかについては、神聖政治とい

うよりは公定教会制として捉える方が妥当であるとする。そして第4章「大覚醒」では「アメリカ」に住む人々に連帯感をもたらしたことによって「アメリカ」としての自覚をもつに至る(52)らしめたという大覚醒——エドワーズやホイットフィールドらを主な指導者とする信仰復興運動——について論じ、第5章「独立革命期」では独立革命期におけるキリスト教会のあり方について述べている。

続いて独立を遂げたアメリカにおいて、それぞれのキリスト教教派がどのように歩んでいくのかについて論じている。第6章「各教派の伸展と変容」では独立革命を受けて大きな打撃を受けた英国国教会やメソジストがどのように再出発をはかっていったかということ、あるいは会衆派や長老派といったそれまでの主流派教会が伸び悩んだこと、またバプテストが勢力を伸ばしたことに触れ、第7章「アンテベラム期」——南北戦争までの十九世紀前半を指す——では広がりゆく西部を中心に生じた第二次信仰復興運動を受けて国内外に対して盛んに伝道が行われたこと、またこの時期にメソジストとバプテストが長老派と会衆派に代わって台頭し二大教派となったことを論じ、更に諸教会の発展を受けて高等教育が拡充され、女子教育も行われるようになったことを述べている。加えて第8章「新しい信仰の諸形態」では、この時期に生じてきたユニテリアンやモルモン教、あるいはクリスチャン・サイエンスや黒人教会等といった新しい信仰のあり方について目配りがなされている。

続いて第9章「南北戦争期」では、アメリカの西部への拡大——「明白なる天命 Manifest Destiny」——とあいまって、南部奴隷州・北部自由州がそれぞれに西部へと進出していったことによって奴隷制をめぐる南北の対立に拍車を掛けられたこと、またそれを受けて南部と北部の両方に勢力を持つ

ていたメソジストやバプテストあるいは長老派といった教会に分裂が見られたことを概観している。こうした対立は多くの犠牲者を出した南北戦争によって終結するが、その際に大きな役割を果たしたリンカンについて、彼が特定の教派との関わりを持たなかった一方でその信仰が深く聖書に培われていたことに触れ、またこの時期に女権拡張運動が見られたことについても述べている。

しかし奴隷制度の廃止が即黒人差別の解消を意味したわけではなく、第10章「アメリカの膨張」は、まず黒人に対する抑圧の構造が維持されたこと、そしてそれに対して改めて幾つかの黒人教会が組織されたことについて触れ、また中国からの移民やヨーロッパからのカトリック移民が偏見や差別の対象となったこと、更には終息しつつあった西部への拡大——アメリカ大陸の西部「フロンティア」は1890年に消失——はその裏面において先住民への抑圧であったことを論じている。他方、東部や北部では都市化・産業化が進み、それと呼応する形で大衆伝道や社会福音、あるいは禁酒運動といった新たな形態のキリスト教が行われるようになったこと、またその一方でハワイの併合等アメリカ国家の海外への膨張と歩を一にする形で日本伝道を含む海外伝道が推進されたことについて述べている。

こうしたアメリカの拡大を受けた楽観主義的な風潮——これは1929年の大恐慌によって水を差されることになる——の反面、第11章「二つの世界大戦」はまず近代化への対抗として道徳あるいは宗教を堅持しようとする運動が極端な純潔の主唱や反進化論といった形で生じ、こうした「原理主義」と名指されるようになる保守的なキリスト教が教会に分裂を引き起こしたことに言及し、またこうした厳格で不寛容な風潮が第一次世界大戦を機に興隆した愛国心と結びつきいわゆる「赤狩り」を引き起こしたこと、他方

黒人や移民に対する差別を再び表面化させ、これが第二次世界大戦時における日系人の強制収容につながったことについて述べている。これらの戦争に対し、クエーカーなどの幾つかの平和主義的な教派を除いてキリスト教会は協力体制を取っていくが、しかしまたこの時期にニューバーら社会に対して預言者的な発言を行っていった神学者もあつたことにも触れている。

最後の第12章「戦後から現代へ」では、まず国際連合が創設されたように戦後新たな国際秩序が模索されつつあつたことと並行的に世界的に諸教会間の協力に向けた動きが見られ、かつアメリカ国内における教会間の協力、あるいは個別の教会における過去の分裂を乗り越えた再合同の動きが見られたことについて述べている。また公民権運動とヴェトナム戦争の60年代を受けて例えばコックスやベラーらのようにアメリカ固有の文脈に基づく神学的な考察が行われたことを指摘した上で、具体的な政治との関わりについてはいわゆる「宗教右翼」勢力が強めてきていることの歴史的背景を概観し、他方女性や同性愛者を教会がどのように取り扱ってきているかについても触れている。

以上簡単に内容を紹介してきたが、まず何よりも本書はアメリカ・キリスト教史についての基本的な知識を確認するのに有用な書であり、またその記述にあたっては少数者の問題、そして共同体の形成に関わる包摂と排除の過程についての視座が問題意識として通底しているように思われる。

著者が本書冒頭で指摘しているように日本におけるアメリカ研究ではキリスト教の問題が必ずしも十分に取り扱われてきておらず、これと関連して本書以前には邦語によるまとまった通史が、既に絶版になってしまっている曾根暁彦による『アメリカ教会史』しかなかった。こうしたことを合わせ考えるならば、本書のように様々な問題に目配りが

なされた通史が著されたことは、現代アメリカにおけるキリスト教の歴史的な背景について学ぼうとするものや、あるいはアメリカ研究に限らず周辺諸学からアメリカ・キリスト教史に関心を持つものにとって益するところ大であるように思われる。また巻末にある著者による短評が付された文献案内も、より知見を深めていくのに格好の手引きとなるであろう。

(星野靖二)

森正人『四国遍路の近現代——「モダン遍路」から「癒しの旅」まで』（創元社、2005年、1,995円）

〈四国遍路〉という
と多様なイメージを思
い浮かべる人が多いだ
ろう。徒歩にこだわる
修行のような四国遍路、
観光資源や観光旅行・
旅としての四国遍路等、
また、観光の対象とい
った商品化された四国遍路と、これに対する
アンチ商品化の立場なども指摘できよう。本書は、日本の近代化以降の約百年に絞り、「宗教現象としての四国遍路」ではなく、時代状況や他の現象と絡み合うことによって生成・消滅している、上記のような多様な四国遍路のイメージや様態を対象とする一冊である。



現在、観光化・商業化された四国遍路に関して、「伝統的でない」「正統でない」というイメージが抱かれることが多いかもしれない。しかし、著者は戦前の四国遍路について扱う前半の四章において、こうした商業化が戦前から起こっており、そこに国内観光の展開やマスメディアの力が働いていたと述べる。例えば、「第一章：「ハイカラ」から「モ

ダン遍路」へ」では、1908年に大阪毎日新聞紙上に掲載された記者による「巡礼競争」等を例にとり、メディアの力によって四国以外の地域に四国遍路の情報が届けられていたと指摘する。また、20年代以降の旅行産業・国内観光の展開による宗教施設の観光対象化、その後30年代前半における四国の鉄道の完成に伴い、従来のスタイルにこだわらず、交通機関を用いてレジャー・観光・ハイキングとしての四国遍路を行う人々「モダン遍路」も既に登場していたのである。

このような消費対象としての四国遍路は、既に戦前に〈イベント〉という形を取ってもいた。「第二章：「空前絶後！」の四国八十八ヶ所霊場出開帳」では、南海電鉄五十周年記念事業として企画され、大阪毎日新聞も後援として名を連ねた「四国八十八ヶ所霊場出開帳」（1937年）が扱われる。十五万人の参拝者を集めたというこの企画では、各札所の本尊分像の御堂筋から難波駅に向かっての大練行や、映画会社の宣伝もかねた俳優陣のスタンプラリーが行われたり、新聞広告でも「ハイキング」「行楽」という面を強調するものがあるなど、イベント・商品としての性質も濃厚であった。ところで、四国遍路は戦時中に国家政策に組み込まれることになるのだが、その前段階として〈日本文化・精神の体現者〉としての弘法大師のイメージが浸透している必要があった。「第三章：弘法大師と日本文化」で扱われる1934年の「弘法大師一一〇〇年御遠忌」もまた、ラジオ番組、新聞特集記事、展覧会の企画などが組まれるなど、メディアイベントとして遂行されており、国家イデオロギーに組み込まれる形で弘法大師のイメージを浸透させることに寄与していた事が確認される。

以上のように、明治後半から昭和初期にかけて、四国遍路は宗教現象としてだけではなく、娯楽・観光として消費されてきた。こうした状況に対して、四国遍路が宗教的巡礼で